

# 幸福学者ノイラート

—— 知識と決定 ——

小 林 純

## はじめに

私たちの知識のあり方をめぐっては、さまざまな見方がある。いわゆる「理論」も知識のあり方の一つだとすれば、「理論と実践」の関係についての理解も、知識のあり方をめぐる問題の一環として位置付けられよう。生涯にわたってさまざまな実践にかかわったオットー・ノイラート (1882-1945) は、また合理的な認識活動と知識のあり方に関しても、興味深い考察を行っていた。「理論と実践」は彼の生き方そのものに関わる問題でもあった。社会主義共同体における経済計算をめぐる論争で実物計算の提唱者として登壇したノイラートは、いわば嘯ませ犬的役割を演じたとされることで、歴史的には用済みとなっていた感がある。だが、近年、新たな光の下で再検討の気運が見られる。これは、経済学的知識のあり方に対する反省が、哲学者ノイラートの再検討を求めている、と表現することができそうである。ここでは、ノイラート再検討までの論理的な過程を、この間に出された優れた研究を手掛かりに要約して、なにが問題とされてきたのかをふりかえり、次に検討されるべきことがらを探ってみたい。

民間の経済学者であった父ヴィルヘルム・ノイラートの影響下に恐慌・失業や貧困をうみだす経済システムへの批判意識を早くから抱いたオットーは、非マルクス主義的社会主義者とされるが、1920年代にはオーストリア社会民主党に入っている。彼自身は大学での研究者の道を歩もうと望んだが、ミュンヘン・レーテへの参加が人生行路を大きく変えた。以後、一貫して様々な運動の中に身を置くこととなった。それゆえ彼の状況対応の生き方には、一貫性が欠けるという印象がもたれているようである。ただ、人々がより幸福な生活を享受できるために、という姿勢は一貫していた。小稿は、その彼を幸福学者 Felicitologist と呼んで、多岐に渡る活動を支えた軸芯を理解しようという関心にもとづく。なお、ここでは対象を (第二次) ヴィーン学団 (1920年代半ば) 以前の彼の言説に限ることにする。

## 1. 出発点

知識のあり方については、ハイエクの議論から始めるのが有効である。彼の知識論は、上記の経済計算論争を間違いなく一つの要因としていた。ハイエクは経済計算論争の関連文献を編集し、編者として2本の論稿を付したが、この2論稿とも、のちに『個人主義と経済秩序』に収録された。したがって、この書により計算論争に発する議論の系譜を追うことが可能である。

ハイエクは編者として論争の基本線をたどるなかで、自己の知識論の意義を確認していったようである。彼は事態をこう見ていた。まず、第一次大戦後に政権に就いた中欧の社会主義政党は、行動計画を必要とした。それまでの社会主義は未来を積極的に語ることはなかったので、この時期の著作が初めて、社会化の具体的問題に関わった。その議論は戦時経済の経験に大きく影響されていた。

この経験は、経済活動の中央指令が実行可能であって、競争体制にまさってさえいることを示したのみならず、戦争経済の問題に対処するために発達した特別の計画技術が、社会主義経済の永続的行政にも等しく適用しうるかもしれないということを示したものと一般的に想定されたのである。//この議論に対する初期の社会主義者の貢献の中で、多くの点で最も興味深く、かつそこに含まれる経済的諸問題の性格をまだ非常に限られた範囲においてではあったが認識していたという点で、とにかく最も特徴的であったのは、1919年に世に出たオットー・ノイラートの著作である。この書物の中で著者は、戦争の経験は次のことをあきらかにしたということを示そうと試みた。それは、財貨の供給を司るのにあたって価値についての考慮をまったく省略することが可能であったこと、中央計画当局のすべての計算は実物で遂行されるべきであり、またそうなされうること、すなわち計算は一つの共通の価値の単位を用いて、それを通してなされる必要はなく、現物についてなされ得るということである。[ハイエク 1990: 188-189]

この実物計算には、ミーゼス、ヴェーバーによる批判が出された。計画経済では生産材市場が存在せず、したがって合理的資源配分は不可能だ、というものである。これに対して、ランゲによる計算可能性の主張が、一般均衡理論の導入という形を採って出された。

ここから議論は、計算可能性ではなく実行可能性をめぐる展開する。ハイエクの知識論は、社会主義擁護派にまずは向けられた。だが後には、彼らが依拠した一般均衡論にも向けられることになる。その芽はたしかにこの段階の議論にも含まれていた。

ハイエクによれば、競争体系における均衡を説明するのに用いられる理論的な抽象化には、ある範囲にわたる技術的な知識は「与えられている」ものとする想定が含まれるのだが、この

知識が本当に所与であり、したがって他の人にも知られうる、ということはありません。計画経済において既知の技術の中から最適なものを選択することは、このありそうにないことが可能な場合だけであろう。中央当局がすべての知識を計算に利用できる、という想定には現実性がない。同様の困難は消費サイドにも言えることである。

適切な生産方法と生産されるべき量とを見出すという実際の作業に着手するにあたっては、それに先立って第三の一連の資料——諸々の消費材の異なった種類とその異なった量の相対的な重要度に関する資料——が利用可能でなければならないであろう、消費者がその所得を自分の好きなように支出する自由を持っている社会においては、この資料は異なった質を持つ商品の全部を網羅した一覧表の形のようなものでなければならないであろう。消費者たちはこれらの利用可能な様々な商品をそれぞれの持つ価格のあらゆる組合せにおいて購入するのである。これらの数値は必然的に過去の経験に基づく将来についての推測という性質をもつであろう... / これらの資料の収集だけでも、人間の能力を超える仕事であることはおそらく明かであろう。[ハイエク 1990: 207 8]

社会構成員すべての消費嗜好まで知ることは不可能である。ハイエクにとって問題は均衡点を求める計算ではなく、「知識」のあり方であった。均衡理論が想定するような「所与」のデータは、現実には知り得ないものであり、中央当局が入手しえるはずもないものである。計算可能性から実行可能性へと論点は移っている。そして計算問題が経済問題を扱い得ぬことから、知識論にもとづいたハイエクの均衡理論批判が前景にでてくる。

計算論争のアンソロジー編纂の後の論稿「経済学と知識」では、明確に知識の問題が焦点に据えられ、均衡理論への批判を介して、ハイエクの市場認識の深まりが示される。アダム・スミスの分業にもとづく市場機構の機能理解にならった、知識の分業にもとづく市場価格機構の理解がここに提示された。

純粋な均衡分析の同義反復的諸命題自体は社会の諸関係を説明することには直接適用できないものである... [ハイエク 1990: 50]

それは我々が均衡について語りうるためには、様々な個人はどれほどの量の知識と、どのような種類の知識とを持っていなければならないかということである。 / ここに知識の分業の問題が存在することは明瞭である。 / 我々が解決しようとしている問題は、各々ほんのわずかの知識しか持ち合わせていない何人かの人間の自発的な相互作用が、どのようにして次のごとき状態、すなわち価格と費用とが一致する等々のことが起こる状態をもたらすのか、あるいはこれらすべての個人の知識を結合した知識を持つ誰かによる作為的な命令によってのみ実現されるような状態をもたらすのかという問題である。[ハイエク 1990:

65 6]

...特定の使用についてその資源の所有者たちに知られている代替的な方法は、これら資源の価格に反映されているからである。[ハイエク 1990: 77]

相互に知り得ない知識も、財貨の市場価格というシグナルに集約され、人はこの価格を頼りに各々の選択を行なえばよい。こうしてハイエクにとって問題は「知識」のあり方をどう見るか、というところに収まった。論稿「社会における知識の利用」(1945)はその総括といえるものであろう。

ハイエクはこう説く。[ハイエク 1990: 111 2] 個別事例に関わる知識は、科学的とは言えず、体系だって整理されてはいない。諸個人はこの知識を自分のために有利になるように利用する。私的所有が保証されて、この知識の利用の結果がその人のためになる場合にのみ、この知識は利用される。「社会のために」利用される保証はない。もっともこうした知識が中央当局の統計に入ってくるような形で存在してもいい。こうした類いの知識を利用しようというインセンティブが個人に、つまり「現場の人」に与えられていなければ、計画経済はうまく機能しないであろう。

われわれが分権化を必要とする理由は、そうすることによってのみ、時と場所の特殊事情についての知識が速やかに利用されることを保証できるからである。[ハイエク 1990: 116]

関連する事実についての知識が多くの人々の間に分散している体制においては、個人が彼の計画の諸部分を調整するのに主観的価値が助けとなるのと同じ仕方、根本的には価格がさまざまの人々の別々の行動を調整する役割を果たすことができる。価格がまさに何を成し遂げるのかを知るために、価格システムの働きのきわめて簡単に平凡な一例についてしばらく考えてみることは無駄ではない。...全体がひとつの市場として働くのであるが、それは市場の成員たちの誰かが全分野を見渡すからではなくて、市場の成員たちの局限された個々の視野が、数多くの媒介を通して、関係ある情報がすべての人に伝達されるのに十分だけ重なりあっているからである。どの商品に対しても一つの価格があるというだけの事実が、過程に関係のあるすべての人々の間に実際は分散している全情報を所有する唯一の人によって達成されたであろう(このことは観念的にのみ可能である)解決を成し遂げるのである。/我々が価格システムの真の機能を理解したいと思うのなら、価格システムを情報伝達のための上述のような機構として見なければならぬ。[ハイエク 1990: 118 9]

すべての知識が財・サービスの価格に集約され、これをまた各自が与件とし、解釈して、次

の行為がなされる。こうして価格機構は情報伝達の機能をもつことが説かれる。ここでは、ある行為が多次元の現実世界に関わるにもかかわらず、すべての対象物が市場価格に通約可能なものとなっている。この価格システムは、マルクスが「商品世界 Warenwelt」と捉えた資本家的生産様式の支配的な社会の姿でもあった。この商品世界の分析をマルクスは『資本』で「経済学批判」として展開していた。

だが、価格システムが情報伝達機能をもつとしても、それはすべての対象世界に関わることなのであろうか。市場に馴染まない財・サービスを、非経済財として土俵外におくやり方が、一般には採られている。しかし希少性問題の発生するところ、価格づけを通じて商品世界の拡張が生じている。臓器しかり、教育、安全しかり、である。アメリカでは、政策という公的な資金を用いる場合、費用 - 便益分析による効率測定のフィルターを通してから特定の政策が実施されるという。だがその計算の担当者でさえ、その手法の妥当性を信じていない、という報告がある。

C氏「最初この職についたとき、人間の命は3500万ドルだって聞きました。そういう話には答えることもできませんでしたから、私はただ黙っていました。二年間は黙ってたな。しかし今はあっさりこう言っています。そいつはいただけない。何かが抜けてるぞってね。」  
/ G氏「...問題は、ご連中（費用便益分析の信奉者）が生物学的システムの基本をまるで理解していないということです。基本の変数をあんなふうに勝手に変えたら、システムは崩壊してしまう。人間だって生きていられなくなる。エコノミストは自分が何を話しているのか、なにもわかっていないのです。」[ベラー他 2000: 125 6]

意思決定のためのデータが、人命をも含めて、すべて価格に一元化されて計算される世界への直感的な反発がここに見られる。また市場の情報伝達機能に馴染まぬ知識が存在することへの理解も。こうした常識の健全さを思う次第である。

## 2. 経済計算論争

### 1) 標準的解釈とその批判

論争を生産的に解釈しようと試みた西部 [1996] の整理によって出発点を再確認してみたい。この論争の標準的解釈によると「主要な争点は、合理的経済計算と効率的資源配分に関する社会主義経済の存立可能性であったが、それはランゲらの市場社会主義の提案によって解決されたと考えられている。」だが西部は「共有されたパラダイムのうえでの議論の応酬ではなく、相異なる複数のパラダイムの差異をめぐる対質として本論争を理解すべきではないか。本論争は各論争参加者に特有の、暗黙的なヴィジョンが明示化され、異なる理論的参照枠が形成され

てゆく分岐点であり、経済理論の異なるパラダイムの形成が準備された出生地ではないか」と見て、のちの研究が特定のパラダイムの後づけの正当化へと狭隘化することがないように、独自の課題を設定した。つまり「論争参加者が論争上の『問題』を独自のヴィジョンから解釈し、それを他の論争参加者に提示しあう過程を経て、異なる複数のパラダイムが次第に明示的に確立される系譜を叙述する必要がある」とした。[西部 1996: 3 5]

一連の論争過程には二つの議論の系列があった。第一は、一般均衡理論が描く市場経済の合理性を参照枠として認めたくらうで、社会主義経済の可能性と合理性を検討しようという議論。第二は、参照枠としての一般均衡論を疑問視し、その「モデルが前提する合理性の概念によっては市場経済の本質的特徴は理解できないので、別の視点からそれらを把握しなければならない」と考える論者の議論である。議論の課題が区別されるべき二つの系列は、はじめは同一視されていた。しかし「はじめに社会主義計画経済が主題として論じられたにもかかわらず、そうした議論の理論的参照枠であった一般均衡論の市場像自身が逆に問い返されることになり、それによって市場経済にかんする認識が深化」という事態が生じた。[西部 1996: 12 4]

この立場から西部が行なった整理では、ミーゼスは以下のように位置づけられた。「高次財を含む生産過程が複雑に相互依存している状況においては、単一の人間が『無数の生産可能性のすべてに習熟し、直接的で明確な価値の判定を下すこと』は不可能であるというミーゼスの議論は、人間精神に限界があるため計画経済は存立不可能であるという主張を示唆している」が、ミーゼス自身は「知識の分業論の原型ともいえるこの論点」を主要なものとは考えていなかった。彼は「最終的には静態的均衡理論の観点から社会主義経済の不可能性を主張した」とみられる。「ミーゼスが十分に整理せずに提出していた、動態的状況における貨幣の価値表現や不均衡価格の市場機構的意義に関する系譜は、市場における知識の分業論と自生的秩序の論理として、ハイエクによって積極的に継承されていく。」[西部 1996: 31 3]

そのハイエクの社会主義経済計算不可能論の論拠は、「出発点」でみたように、資源の利用に関して代替目的間で決定を行なわねばならぬ「経済的問題」が解けぬこと、データ収集が無理なため実行不可能であること、そして、私的所有が欠けていては「疑似競争的解決」をはかってもアクターのインセンティブや責任感が発揮できず官僚制の問題を生むこと、に要約される。ここで西部は、「社会主義経済における消費者選択の自由が中央計画局により社会的観点から制限される可能性を示唆するドップ」へのハイエクの反論を紹介し、こう指摘した。「消費者選好が絶対的に尊重されるべきとする消費者主権を批判するドップの見解は、それ自体としては多くの真理を含んでいる。しかし、それは、『経済的問題』の存在を無視し、個人の異なる目的や動機を社会的目的に強制的に還元するための根拠として利用される危険性があることは確かであって、ドップの立場から『自由とは何か』という問題にどう答えるのかが問われざるをえないように思われる。」[西部 1996: 45 6]

やや先走った。以上に見た限りでの西部の整理は、ラヴォイやヴォーンの著作が邦訳された<sup>1)</sup>いま、日本でも基本的に受け入れられていると考えてよからう。もう一度出発点に戻り、もう一つ別の整理を見ておこう。

## 2) 計算論争：オニールの代替的解釈

「計算論争の勝者はだれか」という挑戦的な表題の論稿においてオニールは、西部にも通じる関心から、論点を別な形で整理する。そこには論争の出発点に、ハイエクのアンソロジードでは外されていたノイラートも位置付けられている。そして西部が標準的解釈の批判から「市場像」の検討へと向かったのとはやや異なり、オニールは、ノイラートとハイエクの知識論の近さに議論を集約させてゆく。彼の課題設定と標準的論争解釈批判をまず見よう。

本稿は、標準化した物語では過小評価されている論争の初期局面、すなわちノイラートとミーゼスの議論を再構成する一試論である。この再構成は、社会主義計算論争なるものがあって、物語はそれについての話である、というのは神話である、ということをはっきりさせる。論争は一つではなく、たくさんあったのだ。とくに、論争の初期局面と後期の間の不連続性の性格や範囲は、標準化した説明では失われている。... / ...ハイエクもランゲも、ミーゼスの議論を後の論争のレンズを通して読んでおり、その点では他の人々も概ねこの二人に従っている。ミーゼスの議論にあった同時代の知的文脈は失われた。とくに、ハイエクよりはランゲに強く見られるのだが、オーストリアの社会主義者オットー・ノイラートの仕事を見過ごすという傾向があったが、それは論争においてはミーゼスの出発点をなす論文で、またヴェーバーの論争に寄与した論稿においても同様に、批判の主対象を成していたものだ。その結果、ミーゼスの立場についての歪んだ理解と、計算論争の物語の誤読が生じている。ミーゼスの社会主義に対する反対論は、論理学とか認識論の問題に向かったのではなく、実践的合理主義の性格についての仮定へと、とくに、選択肢間の合理的選択は単一の価値単位での通約性を必要とするという主張へと、向かったのである。その後の論争は、同じ仮定に立ちつつ対立する立場を採る両側を巻き込む。一方では、テイラーとランゲは、合理性と通約性についてのミーゼスの仮定の真理性を当然のこととした。他方ハイエクは、ミーゼスの仮定を決して共有しなかった。実際彼の後の著作は、ミーゼスの採った立場よりもノイラートのそれにはるかに近かった。ノイラートの「似而非合理主義」批判はハイエクの後の合理主義批判の中に繰り返されている。ハイエクは、ミ

---

1) ラヴォア『社会主義経済計算論争再考——対抗と集権的計画編成』吉田靖彦訳、青山社、1994年；ヴォーン『オーストリア学派の経済学——アメリカにおけるその発展』渡部ノ中島訳、学文社、2001年。1970年代に経済計算論争の検討が「新オーストリア学派」のアイデンティティ形成となっていた様子が伺える。

ーゼスを認識論的な観点から再解釈はしなかった。ミーゼスにおける知識への言及は彼の議論にとって中心的ではない。ハイエクはむしろ、論争を、計画経済の批判のために異なった土俵へとシフトさせたが、これはミーゼスよりもノイラートと共有するものが多かった。[O'Neil 1996: 432-3]

「社会主義共同体における経済計算」における当初の議論で、ミーゼスはまず、二つのグループを標的として批判する。第一は、経済計算の単位としての貨幣を別の単位に代えることを唱えた社会主義理論家たちである。代替単位の候補として出された二つは、マルクス主義の文献の中でときに提唱された労働時間と、ポッパー＝リンコイスやパロット＝アトランティクスといったエコロジー経済学者の提唱するエネルギー単位であった。第二の標的はノイラートである。周知のように彼は、合理的な経済的選択が単一の計算単位を必要とするということを否定し、実物計算に基づく「実物経済」を提唱した。ノイラートは、社会主義経済は財の使用価値のみを考察するがゆえに、「実物経済」となるはずであり、そこでは選択肢間の比較のために貨幣が演ずる役割は存在しなくなる、と論じていた。

われわれは少なくとも古びた偏見から身を解き放ち、大規模な実物経済を充分通用する経済形態と見なさねばならない。それは、いかなる完全な計画経済も実物経済となる、という意味で、今日ではもっとも重要な経済形態である。したがって社会化とは実物経済を押し進めることを意味する。分裂した統制不能な貨幣秩序に固執する一方で、同時に社会化しようというのは、内的矛盾である。(ノイラートからの引用、[O'Neil 1996: 434])

このような経済にあっては、エネルギー使用や原料使用等についての物理的統計が必要とされるが、比較のための単一の単位の役割は必要無いとされる。意思決定の基礎として利用される単位は、貨幣単位であれ労働時間であれ、存在しない。人は、二つの可能性の望ましさを直接判定せねばならない、これがノイラートの見方であった。意思決定のための単一の測定手段がない場合には、選択は、選択肢を直接比較する必要がある。その意味するところは、「技術的」観点からする決定にあつてさえも、政治的および倫理的な判断を排除することはできない、ということである。こう主張することでノイラートは、市場を批判するだけでなく、労働時間であれエネルギー単位であれ、意思決定において単一の単位を用いて市場に代わる社会主義を選択肢とすることを批判していたのである。

さて、二種類の議論の双方を批判するミーゼスは、実践的合理性の性格、およびその通約可能性に関するいくつかの仮定に依拠していた。まず、最も単純な個人的決定を超えたレベルでは、合理的な経済的意思形成は、それを基礎にしたら代替的な事態の価値を計算して比較できる、という単一の尺度を必要とする、という仮定。それゆえ、例えば、発電源として滝を利



用するか、それとも鉱山を拡張して石炭エネルギーをもっと効率的に活用するか、という選択肢を前にした場合、われわれは、何らかの方法で両者の利点や便益を計算する必要がある、かくしてこの事態が共通の測定手段を必要とする、という結論になる。

たしかに「財の主観的使用価値」は帰属のための単位をなんら与えない——「価値判断は測定しない、それは配列し、格付けするのである。」そうした価値は、だが、このように選択肢間の比較に直接入ってくることは出来ない。労働時間も適当な基礎を与えることはできない。異なる労働形態はそれら自体が質的に異なっており、共通の単位に服しえない。マルクス経済学で試みられている「複雑労働」の「単純労働」への還元といったものは成り立たない。これと対照的に、測定の共通単位は市場での貨幣価格で与えられている。ミーゼスいわく、交換価値に基づく計算は諸価値を共通単位に還元することを可能にしてくれる。貨幣価値は比較の唯一の適当な単位をなす。[O'Neil 1996: 435]

こうしてミーゼスは、社会主義が単一の計算単位をもたぬと説くノイラートを一面で承認はするが、「そうした単位の必要性を受け入れないため、その立場は『克服しがたい困難』をもつ」と理解した。ミーゼスからすれば、諸選択肢のもつ様々な有利さを前にして人は計算によって明確な答を与えることができるのだから、選択肢間の合理的比較は、交換価値を測定する貨幣（表示の）価格を必要としている。

ミーゼスとノイラートの論争は、実践的合理性の性格に関する相違に向かっている。ミーゼスにとって合理的決定とは、最も単純なもの以外ならばいずれも、相異なる価値の通約可能性を必要とする。そこでは、それを使えば異なる選択肢間の選択を計算の問題へと還元できるような、単一の共通単位である必要がある。ミーゼスはアルゴリズム的实践理性観を前提している。合理的意思決定は、なんらかの問題に対して明確な答に達するため、機械的計算手続きの応用を必要とする。[O'Neil 1996: 435]

ここからオニールはノイラートの説明に向かう。ノイラートは「似而非合理主義」批判にもとづいて、以上のような合理的選択の説明を否定していた、というのである。ノイラートのこの見方は、1913年の「デカルトの迷子と予備的動機」と1912年の「快樂極大化問題」という2本の初期の論稿に見られる。前者の論稿でノイラートはアルゴリズム的理性観を批判している。「どんな場合でも人は行為の様々な可能性を考慮することにより、一つの結果に到達することはできない」というノイラートは、意思決定を導くわれわれの知識は不確実なもので、合理性の規則は、何が知られているかが所与であっても、ただ一つの答を決定することは稀であり、理性を信じる合理主義者は、決定に至るさいの理性の力には限界があることを認識せねばならない、と主張する。オニールは、ハイエクの主張に重なるノイラートの文言「合理主義がもっともよくその力を発揮できるのは、現実の洞察には限界があることを明確に認識するという場合

である」を引き、ノイラートの似而非合理主義批判が、行為と思考の両方にかかわるものであることを確認する。

あらゆる決定に答をだすような洞察の規則というものが存在する、と信じることは、似而非合理主義者の徴表なのだ。似而非合理主義は行為と思考の両方の分野に存在する。例えば、それを採れば誤りをなくしていくらでも真理への接近をもたらすような科学的方法のための規則が存在する、といった信仰のなかに。[O'Neil 1996: 436]

アルゴリズム的な知のあり方に対する批判、これがノイラートの似而非合理主義批判の核心であった。そして彼の共通の単位の可能性の否定は、快樂計算にもおよんでいる。彼には独特な功利主義的・エピキュリアン的な思考がみられるが、計算可能な快樂の単位の可能性は否定する。快樂それ自体もまた通約不可能なものである。

アルゴリズム的規則と価値の通約可能性とに信をおく似而非合理主義の拒否は、実物経済としての非市場社会主義というノイラートの見方を示すものであり、また計算論争での彼の議論の基礎にもなっていた。こう見て来ると、ミーゼスの批判は、ノイラートが初期の著作の中で攻撃した実践理性の領域における一種の似而非合理主義を体現したものとなっていることが分かる。こうした論理的な位置関係を設定した上で、オニールは、1928年の「個人生活と階級闘争」でノイラートが、代替的エネルギー源間の選択についてのミーゼスの例に対応していたことを紹介する。

石炭鉱山を保護すべきか、人力をもっと用いるか、という問題を考えてみよう。答は、例えば、水力が有効に開発されるべきだとか、太陽熱がもっとうまく使われるであろうなどと考えるか否かに左右される。もし後者の考え方を採るなら、人は石炭をもっと自由に「消費」すべきであり、石炭が使えるところでは人力を浪費しようとはしない。だが、今の世代があまりに多くの石炭を使ったら、将来何千もの人々が凍え死ぬではないか、と心配するなら、人力をもっと多く使って石炭を節約するであろう。こうした、あるいはまた別の多くの非技術的な事柄が、技術的に計算可能な計画の選択を決定する...生産計画を何らかの単位の単位に還元し、そうした単位の見地から様々な計画を比較しうる、などという可能性を我々はもっていない...。(ノイラートからの引用、[O'Neil 1996: 437])

実物経済論者ノイラートにしてみれば、合理的な実践思考は、必ずしも、意思決定を純粋に技術的な手続きに還元するなんらかの単一の単位をもつ必要は無い。決定には倫理的、政治的な判断が必要なのである。たしかにミーゼスは、市場経済でも「非経済財」が存在することは認めており、それは「交換価値の担い手ではない」財なのであり、環境財はその例で

あった。しかしミーゼスの立場は、これも周知のとおり、我々が非経済財と経済財の間での選択を迫られており、好むと好まざるとに関わらず、非経済的なものの経済的評価を決定に際して暗黙裏に行なっている、というものであった。この立場から、環境財や健康や誇りといったものに値づけを行なうことは、良心の痛みを伴うにせよ、そのことは貨幣経済の欠陥ではない、事物の本性に根ざすことである、という有名な主張が出てくることになった。そうしてオニールはこのミーゼスの立場を批判しつつ、その先の問題にまで触れている。

非経済財問題へのミーゼスのこうした対応は受け入れがたい。彼は、市場経済には、非経済財を含み、また貨幣単位の利用に依らずしてなされうるし、またなされている経済的決定が存在することを認めている。この問題への彼の態度は論点を回避している。ミーゼスは、明らかになると想定されていること——つまり、あらゆる合理的決定は、計算の規則を適用できる比較用単位を含む、ということ——を仮定した場合にのみもっともらしさを備える決定の、再描写をわれわれに提供しているだけだ。このことが少しでももっともらしさをもつのは、人がすでに合理的理性のアルゴリズム的な理解に捕われている場合のみである。ここで問題に対するノイラートの説明はこれより強力だ。彼は、比較可能性が必ずしも通約可能性を前提にしないこと、どの計画を採用すべきかについて最終決定を出すのに機械的に適応が可能な規則など存在しないこと、最も技術的な意志決定でも非技術的判断には不可欠の役割があること、を正しく認めていた。/だが、本当のところ、ノイラートが略述したような類いの非技術的判断を恒常的に用いることを基礎にして経済を運営することなど、できないであろう。深く考えずに従うことができ、相異なる状態を比較する明示的判断の余地を減らしてくれるような、目の子算とか標準的手続き、既定の手続きや制度的編成には、不可欠の役割がある。我々は、四六時中、倫理的・政治的な判断を慎重に行なうことなどできない。時間の制約、資源の効率的利用、知識の分散、という条件があり、これらが規則と制度を必要としている。そうした規則と制度は、熟慮した判断が一番大事なときのために、我々にそのための余地と時間を割いてくれる。ミーゼスとヴェーバーの批判が向けられたノイラートの立場にある明らかな弱味のいくつかは、それが代替選択肢の直接的評価鑑定が常に可能だと仮定しているかに思えるところにある。

[O'Neil 1996 : 438 9]

こうしてオニールは、ノイラートの問題を指摘し、いわゆる「制度」の意義を確認した後、それが価値両義的な機能を担うことを指摘して、こんどはこれをもってハイエク批判にまでおよぶ。分散した知識がよい結果をもたらすように配置されるやり方として市場が評価されるにしても、それが一番よいとは限らない。生態学的に有害な帰結をもたらすのであれば、人類は市場に制約を課す挙にでることとなろう。また、我々が判断を下すことができるように制度と

規則は必要なものだが、それは現行の制度と規則が必要だ、ということの意味するのではない、と。[O'Neil 1996: 439]

オニールのこうした指摘は、彼の経済学的な立場を示唆するものと思われるが、ここでは彼の結論へと急ぐことにする。ミーゼスは計算単位の必要性を主張して計算問題を提起した。ランゲはこの立場に乗る形で対応した。ハイエクは、複数の社会的選択間に計算の手続きが存在しないにもかかわらず合理的な選択が可能となるのはなぜか、を問題とした。このハイエクの立場は、ミーゼスを離れて、似而非合理主義批判を展開したノイラートに近くなる。ハイエクの「合理主義」批判は、完全なデータに合理的な技術や規則を当てはめるというデカルト的な合理的選択モデルを受け入れない。理性は、合理的洞察の限界を認識できるところにその強みを発揮する、という見方において、ノイラートとハイエクは一致する。[O'Neil 1996: 439-41]

両者の違いは次の点にある。ノイラートは社会的選択においては技術的計算は不可能とした。選択にはアルゴリズム的手続きにのっかる通約可能な単元に還元できない倫理的政治的次元というものが含まれる、と考えるからである。ハイエクは市場や社会に目的を認めない。異種の価値を抱く諸個人の共存という問題は、法の支配と市場をそなえた「偉大な社会」によって解決される。ノイラートは通約不可能な価値多元性の下にあっては、選択肢間では非技術的な判断、それゆえハイエクから見れば拒否されるであろうような倫理的判断を必要とした。以上のように整理した後で、オニールは論稿をこう締めくくった。

だがこれらの両者の差異は、ミーゼスとランゲに共通する合理的選択についての仮定に対する、両者の共通の批判の上に根拠づけられる。一つの社会主義計算論争があって、両サイドにずっと連続性が保たれて行なわれた、という、よく言われる物語は神話である。そしてその勝者が誰であったかについての物語も同じである。社会主義計算論争に関する限り、勝利の栄冠は、社会主義の批判者でも擁護者でもなく、ミーゼスとランゲに相對したノイラート＝ハイエクの立場のものだ。この理由からして、実践理性についてのランゲ＝ミーゼスの仮定が経済学内部で変わらずに支配的であったことは、経済学を永く苦しめてきた基本問題の一つである。[O'Neil 1996: 442]

### 3. デカルトの迷子

前項に示したように、オニールは勝利した二人を分けるものについて「ハイエクにとっての問題は、なぜ、競合する価値を抱く異なる諸個人が共存し、活動を調整できるのか、ということになる。法の支配と市場制度を備えた「偉大な社会」がこの問題を解決する。対照的に、ノイラートにとっての問題は、通約不可能な価値の多元性（実質的な価値的立場）の場合、代替

肢間の社会的選択はどうしたら可能か、ということになる。答は非技術的な判断を必要とする」[O'Neil 1996: 442] と整理した。この整理だと、ハイエクのその後の作業、つまり「偉大な社会」に必要なメタ法の発見を試みた『自由の条件』は旨く位置づくことになる。ただ、本稿の「出発点」で見たような、結果としての「価格」が異種の社会的行為の通約基盤となる、という論理は、そのまま残ることになるであろう。したがって、むしろ、西部がハイエクのドップ批判に付した、個人の目的と社会的目的の間に生じる「自由とは何か」という問題をここに付け加えることで、ハイエク = ノイラートの分岐を明示化できるのではないか。けだしハイエクは「社会的正義」を批判する『法、立法および自由』に後年向かうことになるのであり、ノイラートは「社会的決定」のために実物計算に固執し続けたからである。

オニールの指摘するように、ノイラートにとって選択肢間の決定には「判断」が不可欠なものとなっている。だが、ハイエクの立場が一貫したものとなるためには、上述の論理の限りでは、公的施設などありえず、道路建設から病院、消防にいたるまで、すべて民営でまかなう、とまで言い切る必要が出てこよう。そうでなければ、結局ミーゼスと同様の論理的帰結に至り、貨幣価値による通約可能性を認めて、費用 - 便益計算による決定を導入することになる。

知識のあり方についていえば、ノイラートの場合、「合理的理性のアルゴリズム的な理解」とオニールが表現したものへの不信が彼の似而非合理主義批判の核心にあった。決定という実践問題と似而非合理主義批判とが表裏関係にあることは、「理論と実践」という形での一般的な関心の存在を思えば容易に理解できる。また有名な「ノイラートの船」の比喻<sup>2)</sup>によっても象徴的に示されるはずなのだが、ここではオニールに導かれてデカルト論を検討しておこう。

ノイラートの似而非合理主義批判は、まずデカルト批判の形でまとめられていた。オニールも論じたように、「デカルトの迷子たちと予備的動機（決定の心理学について）」がそれである。これは哲学の分野では、すでによく問題とされてきたが、経済学の分野ではあまり顧みられていない。その理由は、経済計算論争の標準的解釈に見られるように、当初より、ミーゼスのノイラート批判によって実物計算の非合理性が論点としては終わっているものとされ、ノイラー

2) 「ノイラートの船」と名付けられた比喻とは、「私たちは船乗りのようだ。船を乾いたドックで解体して最良の部品で再構築することもできずに、広い海のうえで船を直さなくてはいけない」というもの。この「定式化は最も一般的に言及されるもので、ヴィーン学団のプロトコル命題論争の最中のものである。これによってノイラートは、知識はなんら確実な基礎付けをもたぬ、すべてはわれわれがそれをいかに『修繕する』かにかかっている、という彼の洞察に、ドラマチックな形を与えた。」[Uebel 1996: 89] ユーベルはこの船が1913年、1921年、1933年、1937年、そして1944年と計5回登場したことを確認している。[Uebel 1996: 91] この船のイメージには、小畑 [2002: 203 14, esp. 211] による解釈と卓抜な形象化がある。筆者は [鈴木, 2006: 66] でこれを知った。プラグマティズム哲学では、クワインが援用したことから広く知られるようになったようである。船の乗客は誰か、彼らの間での対話・交流の「共通の基盤」（通約可能性）とは何か、という問題に関しては、野家 [1994: 285, 292, 295 6] が触れている。

トが始めから土俵の外に置かれたからであろう。ハイエクのアンソロジー編集の意図を想像すれば、そのように解釈できる。その意味で、オニールの舞台設定によってノイラートの登場機会がようやく現われたことになる。

とはいえノイラート自身は、第一次大戦前よりすでに、戦時経済論や実物経済計算論と併せて、この決定問題についての議論を展開していた。デカルト論に「船」は出てこないが、同一の問題が扱われており、副題には「決定」が明示されている。この論稿によってノイラートの立場を見ておこう。

ノイラートはここでまず、デカルトの理論と実践にかかわるいわば二層の構成を問題にして、実践的領域でなされた正しい洞察が、思考の領域に貫徹していないことを指摘し、我々の知識のあり方においても一種の決定を契機として前進がなされる、という構造を説く。このことは同時に、知識の全面的妥当性を僭称するという合理主義的思考の限界を指摘することによる似而非合理主義批判の提示となっていた。

暫定的な規則がないと困るのは実践的な領域だけである、と考えたのは、デカルトの根本的な誤りであった。一つといわず多くの点で思考もまた暫定的な規則を必要とする。時間の限られた人生ということがすでに、われわれを前へと突き進めるのだ。見通しうる将来に世界像を完全なものとする、という望みは、暫定的規則を必要物たらしめる。だが原理的な契機もまたデカルトの見方に反駁している。世界観あるいは科学的体系を創出せんとするものは、*疑わしい前提をもって作業せねばならない*。全くの白紙から出発して、最終的に正しいと承認された命題をつないでいくことによって、一つの世界像を創出しようという試みは、いずれも必然的にいかさまだらけである。われわれの会う諸々の現象は、命題の一次元的な連鎖では記述されえないほど、相互に結びついている。それぞれの命題の正しさは、他のすべての命題の正しさに関連している。世界に関する命題のそれぞれは、他の無数の命題を同時に暗黙裏に利用することなくしては、およそ定式化することなどできない。またわれわれは、先行するすべての概念構成を利用しなければ、一つの言明を下すこともできない。われわれは一方で、世界に関する命題それぞれと、他のすべての命題との結びつきを確認せねばならぬが、他方で、すべての思考系列とこれまでの思考系列との結びつきをも確認せねばならない。われわれは、手持ちの概念世界を変更することはできるが、それを無視することはできない。それを根底から更新しようとする試みは、いずれも、その性質からしてすでに、既存の概念の子なのである。[Neurath 1991: 59]

知識、概念、命題によって対象世界を理解するという人間の営みは、完全無欠な構成を持って進むわけではないし、未来に完全を期すこともできぬ。また部分の認識は全体認識と分かちがたく結び付いており、そのことは対象世界のあり方によるものだ。そして、手持ちの材料は

過去から引継いだものである、という見方は、いわゆる経験主義的立場の宣言であった。無前提の白紙状態で合理的な概念構成ができるわけではない。我々は理性の全能に信頼をよせることはできない。なぜなら実践のみならず思考もまた暫定的な規則を必要とし、それが「疑わしい前提」かもしれないからである。

人間はたとえ「疑わしい前提」であろうと、それを根拠に前進しなければならぬ局面に立たされる。そしてその一步前進の決定が「理性による合理的推論によったものだから、それは必ずや正しい決定なはずだ」という、自己正当化を試みたくなる。自己防衛の心理的メカニズムの発動とさえ言える局面がここに現われる。ノイラートは、まさにこの「決定の心理学」を問題にしていた。

自らの洞察ですべてが片付けられるという信仰に執着する人は、そもそも、デカルトが科学の発展の遠い目標として提示した完全な世界認識を先取りしている。この*似而非合理主義*は一つには自己欺瞞へと、また一つには偽りへと導く。教育と性格がこうした誤謬を支える。この誤謬は、合理主義の父として扱われるのが常のデカルトが、実践的行為の領域では自らそれを逃れていた。似而非合理主義者は、十分な洞察を、まさしく厳格な合理主義が論理的な理由からしてそれをすでに排除しているところで、手にしたかのようなふりをするなら、真の合理主義に対して不正を働いている。そのときどきの洞察の限界を鋭く認識するという、まさしくこの点にこそ、合理主義の中心的な強みがあるのだ。私はかくも広まった似而非合理主義への傾向を、迷信への傾向と同様の、無意識的な指向性から導出してみたい。人は、一義的な決定を可能とするのに適した以前の通例の手段を、押し寄せる啓蒙によってどんどん奪われていった。そのため人は、なんとしてもしかるべき代用品をそこから得ようとして、洞察に身を預けたのである。似而非合理主義、ことを規制し未来を告げる諸力への信仰、そして予兆への信頼、これらはみなこうした方向において共通の根をもっている。似而非合理主義者はつねに自己の洞察を根拠に行動しようと望み、それゆえ、己れが洞察から行為したのだという自覚を自分に示唆してくれるものには何であれ感謝する。[Neurath 1991: 63 4]

占いや抽選、予兆といった何らかの決定手続きがかつて持っていた力は、啓蒙の結果として、すべて理性による合理的な洞察に回収されてしまった。しかし、最後にその洞察すら機能しない場面が現われたならどうであろうか。こうしてノイラートは、決定問題に「予備的動機」をもって答えた。さいころやくじ引きによる決定は、決して理性の放棄なのではない。そこには理性的洞察の限界を知るに至る過程があった。

彼ら [何かのシンボルの示唆効果が無力化してしまったところで決定をせまられる人々]

が迷信や本能、あるいは全くの偏狭さに戻らないとしたら、彼らに残されたものは、洞察がもはや効かないところで予備的動機に頼る以外にはない。それが、「何かが起こらねばならぬ、われわれが過りと認識されたものをすでに排除してしまった後では、われわれに思い浮かんだものを、あれかこれかを、為そうではないか」といった議論で満足するのであれ、あるいは、洞察が効かない地点に達したとき、人は正式にくじ引きするか、そうでなければ事柄内部に備わっていない一つの契機に決定を下させる、ということであれ、同じである。[Neurath 1991: 64]

我々はくじ引きによる決定を嘲笑することはない<sup>3)</sup>。そしてこの決定を当事者たちが受け入れる条件は、彼らの集団的行為の歴史的な積み重ねがそこに存在している、という事実である。社会が崩壊せずに存在しているという事実は、そこにある程度の人々の共同行動が存在していることを示している。そこに諸個人の意識的な協働への指向性を認めることができれば、当事者間で「予備的動機」による決定が受容されると想定してよいであろう。

この論稿の最後にノイラートは、デカルトを取り上げた意味を語っている。今日の我々から見てそう解釈できる、というレベルを超えて、彼自身が自覚的にデカルトに仮託したという面があるように思われる。またここで、後生ユートピアンと称される彼にふさわしい思考を提示する。ノイラートはここで、本能、権威、似而非合理主義、そして予備的動機という段階設定でおおまかに歴史を眺め、似而非合理主義がまだ支配する現代に将来を構想する自己の立場をどう根拠付けるか、と自問して答を出していた、と読むことができそうである。

さてデカルトの比喻に戻ろう。森の中で途に迷い、決定的な方向を決める何の手がかりももたない旅人にとって、一番大事なのは、精神的に進むことだ。第1のものをある方向へと突き動かすのは本能であり、第2のものは予兆に動かされる。第3のものは、慎重に万が一のあらゆることを考慮に入れ、ありうる根拠と反対の根拠とをすべて検討し、欠陥があることも自分には分からない不十分な諸前提のもとで、最後には誇り高く背筋をのばして自分で正しいと思った一定の方向に進む。最後に第4のものは、できるかぎりの反省を試みて、しかも自分の洞察が貧弱すぎることを認めるのに尻込みせず、静かくくじ引きに決定をゆだねる。四人の旅人が森を抜ける可能性はみな同じでしょう。にもかかわらず、四人の態度に極めて異なる判断を下す人がいるだろう。洞察を最も高く評価する真理探究者にとっては、最後の旅人の態度が最も共感できるものとなろうが、似而非合理主義的な第3の旅人の態度は最も反感を抱かせるであろう。

---

3) つい最近、某大学で学部長がコイン・トスで選ばれたという新聞報道があった。ニヤリとするものはあれ、決して誰も「嘲笑することはない」であろう。



多分われわれはこの四つの態度様式のうちに、人類の四つの発展段階を見ることができ  
る。…本能、権威、似而非合理主義、予備的動機という四つの時代の本質を明らかにしよ  
うと試みるならば、多くのことが分かってくるだろう。…ここで私が、合理主義の首座と  
しての予備的動機に、将来を託そうと試みるのは、以下のような考慮を根拠としてのこと  
である。われわれは様々なやり方でユートピアを構成することが出来る。それはたとえば、  
最も発展した形態がさらに発展すると考える、とか、将来の諸形態の萌芽を探す、という  
形であってもよい。たとえば、われわれは、一切の国家的事象が組織的にあらかじめ計算  
されるような時代に近づいている、という観念を構築することもできよう。ここで、そん  
な状態が間もなく登場するなんておよそありえない、ということを示すのは、いささか行  
き過ぎであろう。しかしわれわれは、だれもその将来を予測していなかった中世において  
すでに合理主義が己の提唱者をもっていたように、すでに存在してはいるが、なお充分な  
開花には達していない諸々の運動をうかがい知ることも出来る。およそなにか新たな一つ  
の精神的方向を想像することなど、極めて困難であるから、ことによっては予備的動機が  
いつか私的公的な活動に強く影響を及ぼすことになる、という可能性を、もっと真剣に考  
えてみるのは、いずれにせよ利点のあることだ。

デカルトは激動の時代に生きた。当時はあらゆる分野で本能と伝統への戦いが、こうし  
た諸力の機能について正しく知ることなしに、始められた。デカルト自身は、すでに見た  
ように、道徳的領域では、一方で伝統を意識的に認め、他方で予備的動機を承認した。そ  
の際、首尾一貫した合理主義者は彼に従うことが出来た。合理主義にとってそもそも道徳  
的領域での将来があるというなら、その限界の自覚的な確認と予備的動機の導入とが、絶  
対の前提である。だが将来がどうなろうと、*合理主義と欠陥ある洞察とが予備的動機の  
助けとどう結びあわされるか*、という問題を論じるのは価値のあることではないか。

[Neurath 1991: 66 7]

本節でみたデカルト論における似而非合理主義批判と予備的動機の説明は、この論稿中に  
「船」の比喻は登場しないけれども、それとまさしく同じ内容を語ったものであると見てよい。  
しかも「理論と実践」両レベルにおいて、すなわち我々の知識のあり方と、実践的行為がどう  
決定されるかという問題とが、ともに「船」の比喻で語られうることの説明なのであった。

#### 4. 経済計算と幸福計算

通約不可能性、似而非合理主義批判、予備的動機と見てきて思うことは、こうした思考を  
「近代合理主義」の権化として理解し、また位置付けることが当たっているのか、ということ  
である。たしかにノイラートは実物計算による完全社会化を提唱した。そのことで、近代的思

考の最たる表現と目される「計画」的思考の主唱者とされてきた。しかし、啓蒙の扱いにしても、先に見た啓蒙思想の展開によって出てきた問題の指摘が一方にあり、他方には「統一科学」や「百科全書」による啓蒙プロジェクトの主導者ノイラートという事実がある。どうもこの人物にはまだ解明されるべき両義的なところが残っているようである。こうした印象が、本稿のような論点抜粋ではノイラートの特異性に迫ることができぬ、ということの現われであるのか、あるいは、今日の「近代」理解と「近代」批判には、なにか見過ごされた欠陥が潜んでいるのかもしれない、という問題につながるのか、筆者にもまだ見当がついていない。他日を期したい。

最後に、計算論争のノイラートに戻ろう。本項の結論を示せば、ヴェーバーとミーゼスの批判、すなわち生産財市場が欠如しては合理的資源配分は不可能である、という実物計算批判（貨幣経済、貨幣計算の擁護）はノイラートには届かなかった。関連する経歴データを駆け足で見ておこう<sup>4)</sup>。

数学を志してウィーン大学に入ったノイラートだが、テニエスの勧めで経済学へと移り、1903年からベルリンでG. シュモラーやA. ヴァグナー、E. マイヤー、ポルトケヴィッチらの下で学び、古代経済史研究によって博士号を取得した。1906年には軍役についた。1907年ごろから戦争への関心が高まってきている。1907 - 1917年、新ウィーン商業アカデミーに教員として勤務。1912年にカーネギー財団から1年間の奨学金を得てバルカン諸国の戦時経済事情を研究し、その成果をもとにウィーンで報告講演を幾度も行なってこの分野の専門家という評価を得た。軍でも戦時経済についての講演を行なった。ウィーンでは数学者ハンス・ハーン（2番目の妻オルガの兄）らと議論を重ねていた（第一次ウィーン学団）。1909年社会政策学会ウィーン大会ではヴェーバーの面前で「快・不快の複合体である生活状態を、快・不快を分けて計算してから総計を算出することなどできない。財全体の価値は財の価値の総計からは導出できないので価値計算には限界がある。国民生活とはその様々な表出が内奥に関連している一個の全体だと鋭く定式化したのは歴史学派創始者の一人だ」と発言していた。[Neurath 1998: 219-20] 1910年、ヴントの『論理学』3巻本の書評論文を発表、知識の分業の統合には専門化が必要だが、全体の展望も欠かせぬとし、古いタイプのヴント的百科全書の可能性を否定、独自の統一科学の考え方を出した。またそこでパレートの静学を批判し、さらに基数ではなく序数による交換・価格論の可能性を説いた。[Neurath 1991: 23-46] 戦時中は戦争省でシュパンやミーゼスと同じ戦時経済部門に所属し、オットー・パウアーはロシアから戻ってからノイラートと同じ部門に配属された。17年にはハイデルベルク大学で講師としての採用が決まり、またライプツィヒで戦時経済博物館の設立にかかわり、館長職を要請された。戦後、ミュンヘ

---

4) 伝記的情報については、[小林 1998] で触れたもの、および Briefe v. O. N. an F. Tönnies, Ser. n. 31933, Briefe von O. N. Kopien, Ser. n. 31937, in: Nachlass Otto Neurath; 'Lebensdaten Otto Neuraths', in Schütte-Lihotzky Sammlung; Personalblatt in Kriegsarchiv III, Kriegsministerium-Internakten Karton 74 などを利用した。

ンのレーテ共和国への協力を誘われ、躊躇しながらもオルガの反対を押し切って参加し、中央経済局長官の指名を受けた。誘ったのはシューマン、以前金欠のノイラートが原稿料稼ぎのためテニエスに紹介されたライブツィヒの雑誌の編集者で、ノイラートを高く評価し、戦時経済調査旅行にも一時同行した人物である。第二共和国崩壊後に逮捕され、裁判で1年半の禁固刑の判決が下る。この法廷闘争の間、メーレンドルフに共同経済構想が犯罪でないと言明してくれるよう要請している。オーストリア外相パウアーの介入でウィーンに戻ってからは、共同経済研究所事務局長となり、ブレンターノやテニエス、メーレンドルフに通信員となってくれるよう頼んでいる。この研究所の活動の一環として住宅地開発運動にかかわり、ドイツから招いたキャンプマイアーと共に運動の組織化に活躍した。

こうした経歴から、貨幣計算なき実物経済の想源についていくつかの示唆を得ることができる。まず戦争という現象への関心はかなり早期よりあった。また戦時経済論は第一次大戦以前に何度か書かれており、バルカン諸国における実物経済の実態を見ていた。それに古代経済史（プトレマイオス朝）の研究から高度な実物振替制度の存在を知っていた。歴史学派の全体論的国民経済観には馴染んでいた。教師として教科書を作り J. スチュアートを取り上げ、また J. ローに触れており、重商主義期の経済論には注目していた<sup>5)</sup>。統計への関心は強く、またハプスブルク帝国には官庁統計に *Wirtschaftsrechnung* の語が存在していたことも知られている<sup>6)</sup>。ただし、確たることはまだ言えない状況にある。1919年に論文集『戦時経済から実物経済へ』が出され、以後のノイラート批判がこの書をターゲットにしたことはハイエクの項で見たとおりである。

1920年刊行の『完全社会化』の「貨幣経済から実物経済へ」の項目では、貨幣計算ではない実質的判断を例示し、併せて貨幣計算をそなえた実物経済の可能性を説いていた。形式合理性の部分的確保による資源の合理的配分がこうして確保される。だがこの方式がどこまで機能するのか、保証はない。おそらくは戦時下のバルカン諸国やオーストリアでの経験が言わせたことではないだろうか<sup>7)</sup>。市場と統制の共存、これは彼の重商主義研究からの印象でもあったはずである。

われわれは、公的手段により学校と病院のどちらを建てるべきかについての決定を、すでにやってきた。純益計算に基づいてではなく、その方策が人々の健康と教育に与える作用の直接的な判断を基にして、である。... / 貨幣額でなくモノ自体が決定の基礎とされる

5) 経済論の英文アンソロジーが出されたが、[Neurath 2004: 194] で言及されているジョン・ローはこの書の索引には拾われていない。

6) [小沢他 1995: 191] に利用されている。

7) たしかにノイラートは戦時中の1917年に「民間経済と国家経済がもはや相互排他的な概念ではなくなる」[Neurath 1919: 172] という期待を表明していた。

なら、貨幣経済ではなく実物経済となっている。…貨幣は商品の指図証として利用されるか、…貨幣は何らかの形で計算単位としてなお維持されるか、ということは特徴づけに充分ではない。そうした「貨幣計算」は経済計画の「実物計算」と並んで存続しうる。合目的に貨幣計算をそなえた実物経済と言える。[Neurath 1920: 14 5]

ことは営利ではなく、人々の幸福の増大こそが重要である。こうしてノイラートは独特な快楽 - 苦痛計算（功利主義）を、しかも通約不可能性を前提に、考案しなければならなかった。ベンサム流の計算が不可能であるとすれば、ここでも実物計算と同様の思考が働くことになる。計算単位はないけれども、幸福感情の序数的な計算ならある程度は可能だ、ということか。こうしていえば「費用 - 便益」計算の両面における計算単位の欠如（通約不可能性）を認めてしまうと、ノイラートの採るべき途は極めて狭くなる。

ミーゼスの批判が出された後も、ノイラートの論調は変わっていない。以下に引用するのは、オーストリア社会民主党理論誌『闘争』に掲載された彼の論稿の末尾である。オーストリア社会化委員会が崩壊した後、「赤いヴィーン」のみ孤島のごとく共同経済の実験を進める中での彼の発言は、誰に向けて発せられたのであろうか。

資本主義経済では個々の経営はいずれも自分の貨幣計算を有し、利益ないし損失を有する。社会主義社会では、特定の構成をもつ全体経済が別の構成をもつ別の経済よりも優遇されるべきか、が評価されうるにすぎない。社会主義経済では、機械工場の指導を農業経営の指導と比較することは、資本主義経済でなら収支決算を出すことで可能なことだが、そもそもできない。機械工場あるいは農業経営のどちらを拡張すべきかは、いかなる全体計画を優先するかということからのみ、決まるべきである。生産的諸力の分配は経済計画を基礎としてのみ決まるのであって、個々の経営の比較によってではない。最高レベルの機械工場を停止する必要が生じる一方で、技術的に極めて不十分な農業経営が拡張されることがある。

組織的に見てこのことは、資本主義経済における簿記が個別経営の収支決算に導くのに対し、社会主義経済ではそうではなく、そこでの簿記はただ、ある経営において機械、潤滑油、原料、労働時間等がどれだけ消費され、完成品、半完成品、くずがどれだけ獲得されたかを示すものだ、ということの意味する。そして中央局の経済監察官は、技術的合理性を、たとえば一定量のレールがより少ない石炭消費と労働力で生産しうることを確認することにより、技術的規則に基づいてのみ検討できるにすぎない。たとえば、そもそもミンシンの生産を犠牲にしたレール生産の拡張が経済的であるか否か、ということとは計算できない。加えて、ある生産期間の末期には当初とは別の諸条件が支配しているのが一般的だ。新型機械が登場しており、工業、農業の生産量が変化し、備蓄にも増減がある。そして蒸

気機関を会計技術的にほし草や薪と比較することはできない。

総括しよう。貨幣利潤の極大値は資本主義経済における個別経営の目的である、それゆえ貨幣計算はそれに対して一つの意味を、すなわち、この極大値が達成されたかどうかを確定する、という意味をもつ。——全体の快と生活幸福感情の、効用の極大値が社会主義経済の目的である、それゆえ効用、快、生活幸福感情の計算はそれに対して意味をもつ。(その計算は暫定的には単位によって可能ではない。)これに対し労働単位による計算は、もし可能であるとしても、社会主義的経済目的にとっては意味をもたない、なぜなら「労働」がではなく、「生活幸福感情増大」がその目的なのであるから。ひとは経済全体を、その「生活幸福感情の産出」という点で、別の経済より程度が高いか低いか、と判定できるのみである。

資本主義社会の個別経営の貨幣計算の代わりに、社会主義では、実物計算が全経済の効用評価を伴って登場する。この事情は、マルクスによって誤解されていなかった。彼は、社会主義経済における単位による計算というものを決して論じてはいないし、エンゲルスもそうである。両者とも、全体の効用のために経済の組織化、労働利用と原料・道具の利用が計画的に行なわれること、のみを語っている。[Neurath 1925: 394 5]

すでにミーゼスとヴェーバーの批判が公表されていた時点での、このノイラートの主張は、実物計算には資源最適配分（利潤極大化）という所与の目的にかなう形式合理性が欠けているという批判をもとせず、目的の所与性自体にも疑問符を付して反論しているかのごとくである。

1920年代のウィーンでは、協同組合企業のネットワーク構築を一環とする共同経済の実験が進んでいた。社会民主党は住宅建設を争点に議会選挙で勝ち続け、教育、保険衛生、労働者保護や社会立法の諸面で成果をあげつつあった。ハイエクは1930年の社会政策学会大会でこのウィーンの住宅政策を攻撃している。[Hayek, 1931: 253 70] 住宅建設の経済理論的な批判点とはもかく、州政府が緊急非難的政策手段を継続したままであることが批判の中心におかれている。たしかに「赤いウィーン」の州政府が展開した住宅政策は、まずは緊急避難策であった。そうであるとしたら、自由主義派の立場から、どんな緊急策が提起されえただろうか。家主層の支配する議会では、戦時下の皇帝勅令でもなければ建築規則ひとつ改正されなかった、という歴史がある。[小林 2005 10: 100] ノイラートたちは住宅建設に、経済的観点からのみならず、そこに「より良い住文化」の契機を挿入して取り組んでいた。一戸建て路線は集合住宅路線に道を譲り、ノイラートはその弁護までも強いられていた。[小林 1999: 18] だが、その時々で状況で住民の幸福感情の増大を目指す姿勢は貫かれていた。

---

8) 二重に困難である。[小林 2005: 77] を参照。

幸福感情といっても、多様な価値の複合体である。ヴェーバーは実質的合理性の基準が一義的でないことから、そこに合理的判断を下すことの困難さを指摘していた<sup>8)</sup>。しかしすでに見たように、ノイラートは多様な価値の分節化自体が困難であるがゆえに全体的な判断を下す、という道を探っていた。したがって、ミーゼスのみならずヴェーバーの批判もノイラートには達することがなかった。そしてこの判断主体が誰であるのか、誰が決定するのか、という問題に対する彼の態度は微妙である。完全社会化は全面的に一挙導入することでしか実現できない、とする基本的態度からすれば、議会の全権を認めることになる。だが特定局面への政策介入、つまり部分的計画に実際にも関与したヴィーン時代の彼には、運動と全体の関わりへの考慮からであろうか、基本的態度への修正が伺える。後年にはアングロ＝サクソン社会への共感を口にし、明確に分権的意思決定モデルに移行した感のあるノイラートだが、20年代の経験は、この移行を促した契機かもしれない。また30年代初頭のモスクワへの出張では、すでに当地の暗い影を感じ取っており、オランダ時代にはアメリカ・メキシコへの出張旅行で各地の事情に触れているから、この移行は漸次的なものだったかもしれない。

さてハイエクの経済的観点からする批判だが、これはいわば後づけで可能なものであった。この批判は、本人は理論的な考察を前面に出しているが、社会主義の実験——孤島の形成(K・ノヴィー)<sup>9)</sup>——を察知しての批判と見た方が、その実践的意味を汲み取れるようである。

## おわりに

ノイラート理解において極めて優れた論稿をものした塩沢は、当時第一級の思想家の一人であるノイラートが「幼稚」と評される構想をもって革命に参加し「その失敗の後にも、『計画』の夢から覚めることがなかった。社会科学の知識とは、いったい、なにを可能にし、いかなる誤りを防ぐものであろうか」と問いかけた。そして「ノイラートの不運は、社会化された社会と計画化された経済の実現に経験主義を適用しようとしたことにある。…計画経済は、一挙に全体に導入するものでなければ、機能し得ない。このために、経験主義がつねにもたなければならぬ漸進性をノイラートは犠牲にせざるをえなかった。」人は共産主義の名の下に行なわれた冒険主義的実験を繰り返すわけにはいかない、経験主義はここから学ぶことから再出発せざるをえない、という一つの答をだしている。[塩沢 1993: 172 4] その塩沢もノイラートを前にして、「船」の比喻に科学の進化・発展過程に関する深い洞察を見るにつけ「なぜこのような考察のできる人が、ハイエクのいう『科学主義』に陥るのであろうか」と戸惑いを隠せない。[塩沢 1993: 177]

われわれはこの「科学主義」の限界を素直に認めて、ノイラートを悲劇の体現者とすること

---

9) ノヴィーの議論については小林 [2001] で紹介した。

で話を終えることもできる。それで釈然としないならば、この「科学主義」を迂回する示唆を含んだノイラートの似而非合理主義批判に学び、例えば環境倫理に示されるような幸福感情の変化をも含めた実在レベルでの変化過程にそくして、「計画」<sup>10)</sup>のリアリティを高めるという道も残されているように思う。その際には、「計画」を構成する知識や概念の既存の根拠も問い直されねばならぬ<sup>11)</sup>、そこまでは「ノイラートの船」の上で可能な作業であろう。まだ他の道もあるのではないか、ノイラートの後年の検討を経て考えてみたい。

#### 文書館史料

Otto Neurath Nachlass, in Handschriften-, Autographen und Nachlass Sammlung, Österreichische Nationalbibliothek.  
Schütte-Lihotzky Sammlung, in Österreichische Universität für angewandte Kunst Wien.  
Kriegsarchiv, in Österreichisches Staatsarchiv.

#### 利用文献

Hayek, v., 1931. Wirkungen der Mietzinsbeschränkungen, in *Schriften des Vereins für Sozialpolitik*, 182. Band, München/Leipzig: Duncker & Humblot: 253-70.  
O'Neil, John, 1996. Who Won the Socialist Calculation Debate?, *History of Political Thought*, 17 3: 431-42.  
O'Neil J., 1999. Socialism, Ecology and Austrian Economics, in E. Nemeth/R. Heinrich (Hrsg.), *Otto Neurath: Rationalität, Planung, Vielfalt*, Wien: R. Oldenbourg: 123-45.  
Neurath, O., 1919. *Durch die Kriegswirtschaft zur Naturalwirtschaft*, München: Callway.  
Neurath, O., 1920. *Vollsozialisierung. Von der nächsten und übernächsten Zukunft*, Jena: Eugen Diederich.  
Neurath, O., 1925. Sozialistische Nützlichkeitsrechnung und kapitalistische Reingewinnrechnung, in *Der Kampf*, Jg. 18, Nr. 10: 391-5.  
Neurath, O., 1991. *Gesammelte philosophische und methodologische Schriften* (Otto Neurath Band 1), Wien: Hölder-Pichler-Tempsky.

10) 塩沢 [1993: 158, 172] はノイラートの「計画」の中身の変化を指摘している。オニールは、計画が諸価値の通約可能性問題と分散した知識の調整問題を提起するものとして、後者にノイラートの「オーケストレーション」の議論をつなげている。[O'Neil 1999: 133, 137]

11) ここでは鈴木 [2006: 63-4] の議論を念頭においている。

- Neurath, O., 1998. *Gesammelte ökonomische, soziologische und sozialpolitische Schriften* (Otto Neurath Band 4), Wien: Hölder-Pichler-Tempsky.
- Neurath, O., 2004. *Economic Writings. Selections 1904 1945*, ed. by T. Uebel/R. Cohen, tr. by R. Cohen/M. Neurath/C. Schmidt-Petri/T. Uebel, Dordrecht et. al.: Kluwer Academic Publishers.
- Uebel, Thomas, 1996. On Neurath's Boat, in N. Cartwright et al., *Otto Neurath: philosophy between science and politics*, Cambridge [UK]/New York: Cambridge University Press: 89 166.
- 小沢弘明他, 1995. 『労働者文化と労働運動』木鐸社.
- 小畑清剛, 2002. 『法の道徳性 (下)』勁草書房.
- 塩沢由典, 1993. 「合理化と計画化」『20世紀社会科学のパラダイム 岩波講座社会科学の方法』岩波書店: 137 83.
- 鈴木英規, 2006. 「『通約不可能性』で『計算論争』を再考する——クリティカル・リアリズムによるノイラート評価」『経済理論』43 1: 57 67.
- 西部忠, 1996. 『市場像の系譜学 - 「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』東洋経済新報社.
- 野家啓一, 1994. 「プラグマティズムの帰結 - 「ノイラートの船」の行方 - 」『分析哲学とプラグマティズム (岩波講座現代思想7)』岩波書店: 271 301.
- ハイエク, 1990. 嘉治元郎/嘉治佐代訳 『個人主義と経済秩序』春秋社.
- ベラー他, 2000. 中村圭志訳 『善い社会 - 道徳的エコロジーの制度論』みすず書房.
- 小林純, 1998. 「ヴィーンのオットー・ノイラート」住谷・和田編 『歴史への視線』日本経済評論社: 271 98.
- 小林純, 1999. 「社会化と労働者運動 - 1920年代のノイラート - 」『立教経済学研究』52 3: 1 22.
- 小林純, 2001. 「1920年代ヴィーンの住宅建設 - ノヴィーとノイラート - 」『立教経済学研究』54 3: 99 128.
- 小林純, 2005. 「ヴェーバー経済社会学の若干の考察」『立教経済学研究』58 4: 75 97.
- 小林純, 2005. 「ヴィーン住宅建設史のひとつま」『社会主義』社会主義協会, 2005 10, 11, 12 月号: 98 103, 101 6, 64 9.